

平成26年度 教科に関する研究
研究主題「思考力・判断力・表現力を育む学習指導と評価」

国 語

論理的に思考し表現する能力を育む国語科学習指導と評価

—目指す児童生徒の姿を明確にした授業づくりを通して—



目次

I	主題について	1
II	授業研究	
	【授業研究 1】	
	小学校第4学年「くらしの中の和と洋」における論理的に思考し表現する能力を育む国語科学習指導と評価	
	－段落相互の関係を図式化し、資料を活用しながら和と洋を比較して紹介する活動を通して－	6
	【授業研究 2】	
	小学校第6学年「立松和平氏のいのちシリーズ作品を本のショーウィンドウでおすすめしよう」における論理的に思考し表現する能力を育む国語科学習指導と評価	
	－言語活動の充実を図り、自他の読み方を交流する学び合いの授業づくりを通して－	11
	【授業研究 3】	
	中学校第3学年「意見交流会を開こう」における論理的に思考し表現する能力を育む国語科学習指導と評価	
	－指導と評価の一体化を図ったスパイラル型の学習を通して－	16
	【授業研究 4】	
	高等学校第2学年「『ふしぎ』ということ」における論理的に思考し表現する能力を育む国語科学習指導と評価	
	－批判的な読みを身に付けさせるための授業づくりとその評価を通して－	21
III	研究のまとめ	26

国語科研究主題

論理的に思考し表現する能力を育む国語科学習指導と評価 — 目指す児童生徒の姿を明確にした授業づくりを通して —

I 主題について

1 論理的に思考し表現する能力の育成について

小・中・高等学校学習指導要領解説（以下「解説」という。）国語科改訂の要点では、次のように示されている。

「小学校国語」 平成20年 8 月

「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の各領域においては、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けることができるよう、内容の(2)に日常生活に必要とされる記録，説明，報告，紹介，感想，討論などの言語活動を具体的に例示している。学校や児童の実態に応じて，様々な言語活動を工夫し，その充実を図っていくことが重要である。

「中学校国語」 平成20年 9 月

「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の各領域においては、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けることができるよう、内容の(2)に社会生活に必要とされる発表，案内，報告，編集，鑑賞，批評などの言語活動を具体的に例示している。学校や生徒の実態に応じて様々な言語活動を工夫し，その充実を図っていくことが重要である。

「高等学校国語」 平成22年 6 月

これまで、実践的な指導が充実されるよう具体的な言語活動を例示していた。言語活動を通して指導事項について指導するという枠組みも，これまでと同様である。
(中略) なお，内容の(2)に示したもの（※言語活動例）は，中学校までも含めて既に指導していることである。

(下線は本資料作成者による。)

下線のように、小・中・高等学校では、具体的な言語活動を例示し、指導事項について言語活動例を通して指導することを一層重視するとしている。以上のことから、児童生徒の、論理的に思考し表現する能力は、その言語活動を行う過程を適切に評価することで、より効果的に育むことができると考え、本主題を設定した。

2 研究の基本方針

平成22年度の研究では、研究主題を「読んで考えて表現する国語科授業の創造」とし、「内容をとらえる（読んで）」、「論理的に思考する（考えて）」、「内容を再構成したり，考えを論じたりすることを通して，論理的に表現する（表現する）」活動に重点を置いた授業づくりを行った。その結果、児童生徒は、書かれている内容を客観的・分析的に捉えることができるようになった。また、平成24年度の研究では、

研究主題を「論理的に思考し表現する能力をはぐくむ国語科学習指導の展開」とし、交流の場の工夫や論点の明確化を通して、論理的に思考し表現する能力を育む授業づくりを行った。その結果、交流を通して自分の考えと友達の考えを比較したり関係付けたりしながら、自分の考えを広げたり深めたりすることができるようになった。しかし、論理的に思考し表現する能力をどのように評価するか、また、評価したものを次の指導にどのように生かしていくかについては課題が残った。

今回の研究を進めるに当たって、国語科における「思考力・判断力・表現力を育むための学習指導と評価」について実態調査を実施した。国語科における「観点別学習状況の評価の観点で『話す・聞く能力』、『書く能力』、『読む能力』について、評価を適切に行うために取り組んでいること」として、「適切な評価規準の設定」や「評価規準を踏まえた学習課題の設定」について、各校種とも、総数では7割前後が重要であると考えて授業を展開していることが分かった。その一方で、「評価計画の作成」、「評価結果のフィードバック」、「評価に係る教師間の共通理解」、「『おおむね満足できる』状況や『十分満足できる』状況と判断される具体的な例などを想定した評価の実施」は3割前後にとどまり、次の指導に生かす具体的な評価の仕方に課題があると考えている割合が多いことが分かった。

これまでの研究の成果及び実態調査を踏まえ、本研究では、評価のポイントを示し、目指す児童生徒の姿を明確にした授業づくりを通して、論理的に思考し表現する能力を育む学習指導と評価について実践的研究を行う。学習指導に当たっては、児童生徒の実態を踏まえた課題を設定し、その課題を解決するために適切な言語活動を行う。評価においては、課題解決の過程の中で児童生徒の学習状況を適切に評価するため、予想される児童生徒の表現例に基づいたモデルを作成して評価のポイントを示す。これにより、児童生徒は「どのような言語活動を行い、どのようなことをできるようにするのか」が明確になり、学習への見通しがもてるようになる。このモデルは児童生徒の表現例を予想した上で作成されているため、児童生徒に付きたい力が付いたかどうかを見取るための評価のポイントとして、児童生徒と教師が共有することができる。そして、評価結果をフィードバックしながら指導と評価の一体化を図る工夫をすることで、論理的に思考し表現する能力を育むことにつながると考える。

3 主題に迫るために

以下に示すア、イの2点を踏まえ、具体的な手当てを講じた授業研究を行う。

- | |
|---------------------------------------------|
| ア 付きたい力を明確にした児童生徒の表現例に基づくモデルの作成及び評価のポイントの明示 |
| イ 評価のポイントに基づく評価結果を踏まえた指導の工夫 |

II 授業研究

授業研究に当たっては、小学校2校、中学校1校、高等学校1校で実施し、授業研究ごとに分析・考察した。

資料 国語における思考力・判断力・表現力を育むための学習指導と評価についての実態調査（数値は％）

- (1) 調査期間 平成25年12月20日から平成26年1月17日
- (2) 調査対象 県内公立小学校542校，公立及び県立中学校229校，県立高等学校96校1分校，県立中等教育学校2校
- (3) 回答総数 717件（小学校430件，中学校188件，高等学校（中等教育学校含む）99件）
- (4) 回収率 82.4％

設問1 国語科における「話す・聞く能力」，「書く能力」，「読む能力」を育むための学習指導が適切に行われているか。（％）

	小学校	中学校	高等学校	総数
そう思う	36.0	37.8	13.1	33.3
まあそう思う	63.5	62.2	79.8	65.4
あまりそう思わない	0.5	0.0	7.1	1.3
思わない	0.0	0.0	0.0	0.0

国語科における「『話す・聞く能力』，『書く能力』，『読む能力』を育むための学習指導が適切に行われている」状況を「そう思う」もしくは「まあそう思う」と回答した割合は，全ての校種で9割以上である。

設問2 国語科における観点別学習状況の評価の観点である「話す・聞く能力」について，評価を適切に行うために取り組んでいること。（複数回答可）（％）

	小学校	中学校	高等学校	総数
適切な評価規準の設定	68.4	63.8	55.6	65.4
評価規準を踏まえた学習課題の設定	70.9	74.5	47.5	68.6
評価計画の作成	32.1	28.2	32.3	31.1
評価時期の設定	22.6	26.6	17.2	22.9
評価方法の工夫	57.2	53.2	43.4	54.3
評価結果のフィードバック	31.9	31.4	21.2	30.3
評価に係る教師間の共通理解	29.3	40.4	47.5	34.7
「おおむね満足できる」状況や「十分満足できる」状況と判断される具体的な例などを想定した評価の実施	31.6	36.2	7.1	29.4
テスト問題の工夫	14.4	45.7	17.2	23.0
特になし	0.0	0.0	7.1	1.0
その他	0.0	0.0	0.0	0.0

校種別に見ると，小・中学校においては，「適切な評価規準の設定」が6割台，「評価規準を踏まえた学習課題の設定」が7割台，「評価方法の工夫」は5割台である。高等学校では，「適切な評価規準の設定」が5割台であり，「評価規準を踏まえた学習課題の設定」，「評価に係る教師間の共通理解」はともに5割弱である。また，3校種の中で中学校において「テスト問題の工夫」が4割台である。しかし，小・高等学校においては，

「テスト問題の工夫」は2割に満たない。

設問3 国語科における観点別学習状況の評価の観点である「書く能力」について、評価を適切に行うために取り組んでいること。(複数回答可) (%)

	小学校	中学校	高等学校	総数
適切な評価規準の設定	69.5	68.6	55.6	67.4
評価規準を踏まえた学習課題の設定	72.3	79.3	58.6	72.2
評価計画の作成	31.4	31.4	31.3	31.4
評価時期の設定	23.7	23.4	17.2	22.7
評価方法の工夫	57.0	50.5	40.4	53.0
評価結果のフィードバック	35.8	46.3	25.3	37.1
評価に係る教師間の共通理解	30.5	42.6	43.4	35.4
「おおむね満足できる」状況や「十分満足できる」状況と判断される具体的な例などを想定した評価の実施	33.3	43.1	13.1	33.1
テスト問題の工夫	15.8	72.9	56.6	36.4
特にない	0.2	0.5	0.0	0.3
その他	0.0	0.0	0.0	0.0

校種別に見ると、小・中学校においては、「適切な評価規準の設定」が7割弱、「評価規準を踏まえた学習課題の設定」は7割台、「評価方法の工夫」は5割台である。中学校においては、「テスト問題の工夫」が7割台である。高等学校においては、「適切な評価規準の設定」、「評価規準を踏まえた学習課題の設定」及び「テスト問題の工夫」が5割台である。しかし、「『おおむね満足できる』状況や『十分満足できる』状況と判断される具体的な例などを想定した評価の実施」は2割に満たない。

設問4 国語科における観点別学習状況の評価の観点である「読む能力」について、評価を適切に行うために取り組んでいること。(複数回答可) (%)

	小学校	中学校	高等学校	総数
適切な評価規準の設定	70.9	66.0	55.6	67.5
評価規準を踏まえた学習課題の設定	73.5	79.8	56.6	72.8
評価計画の作成	35.1	34.6	32.3	34.6
評価時期の設定	23.7	22.9	17.2	22.6
評価方法の工夫	54.0	45.2	38.4	49.5
評価結果のフィードバック	30.7	36.7	21.2	31.0
評価に係る教師間の共通理解	31.9	39.9	44.4	35.7
「おおむね満足できる」状況や「十分満足できる」状況と判断される具体的な例などを想定した評価の実施	31.2	39.9	10.1	30.5
テスト問題の工夫	18.8	74.5	58.6	38.9
特にない	0.0	0.5	0.0	0.1
その他	0.0	0.0	0.0	0.0

校種別に見ると、「読む能力」も「書く能力」と同一傾向である。小・中学校において

は、「適切な評価規準の設定」は7割前後であり、「評価規準を踏まえた学習課題の設定」は7割台である。小学校では「評価方法の工夫」は5割台である。一方、高等学校では、「適切な評価規準の設定」，「評価規準を踏まえた学習課題の設定」が5割台である。また，中学校・高等学校において「テスト問題の工夫」が比較的高い値を示しており，中学校は7割台である。しかし，高等学校においては，「『おおむね満足できる』状況や『十分満足できる』状況と判断される具体的な例などを想定した評価の実施」は1割であった。

設問5 設問2から4で選択した項目について，課題となっていることがあれば，自由に記述してください。

課題となっている点に関して，「評価規準を適切に設定するのが難しい」，「おおむね満足できる状況から判断される具体的な例などを想定した評価が難しく，教師間での共有にも課題がある」，「評価結果をフィードバックしても効果が上がらない」，「話す・聞く能力の評価は，評価の時期や評価の方法が難しい」等の意見があった。

設問6 設問2から4で選択しなかった項目について，課題となっていることがあれば，自由に記述してください。

課題となっている点に関して，「小学校の場合，国語の専門ではない場合も多く，教師間の共通理解は難しい」，「評価結果をどのように学習にフィードバックし，児童の力を高めていくかが難しい」，「話すこと，聞くことにおいては，主観に頼った評価をすることがある」等の意見があった。

設問7 国語科における「話す・聞く能力」，「書く能力」，「読む能力」について評価を行う上で，工夫していることがあれば，自由に記述してください。

工夫している点として，「児童（生徒）に評価の規準を伝え，児童（生徒）に分かりやすいものになっている」，「外部講師を招聘して授業のレベルアップを図ったり，職員間で評価の観点を話し合ったりする場を設定している」，「成果や課題を累積し，学びをフィードバックできるようにしている」，「自己評価や相互評価の方法を実態に合わせて工夫改善している」，「自己評価と相互評価を合わせた自己分析シートや振り返りカードを工夫することで，生徒自身の学習に役立つ評価となるように努めている」等の意見があった。

II 授業研究

【授業研究1】

小学校第4学年「くらしの中の和と洋」における論理的に思考し表現する能力を育む国語科学習指導と評価
—段落相互の関係を図式化し、資料を活用しながら和と洋を比較して紹介する活動を通して—

1 単元名 4-2 日本文化研究倶楽部を開こう「くらしの中の和と洋」

2 単元の目標と観点別評価規準

- 和と洋を比較して紹介するために必要な情報を得られるよう、意見を交流しながら、友達の意見を自分の考えに役立てようとする。 (関心・意欲・態度)
- 目的に応じて、比較する事柄の中心となる語や文を捉え、段落相互の関係を図式化して、自分の考えを資料にまとめることができる。 (読むこと)
- 段落相互の関係を示す接続語の役割を理解し、文章を読んで自分の考えをまとめる際に用いることができる。 (伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
紹介するために必要な情報を得られるよう、意見を交流しながら、互いの感じ方や考え方の違いに気付き、自分の考えに役立てようとしている。	3年生に紹介するために、比較する事柄の中心となる語や文を捉えて段落相互の関係を図式化し、自分の考えをプレゼンテーション資料にまとめている。	段落相互の関係を示す手がかりとして接続語の役割を理解し、文章を読んで自分の考えをまとめる際に用いている。

3 単元の指導について

(1) 児童観 (平成26年9月3日実施 調査人数30人)

説明的な文章の学習では、1学期に「広告と説明書を読みくらべよう」に取り組んだ。この単元の学習を通して、フリップを作成するために、文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章などを引用したり要約したりする能力が身に付いた。しかし、本単元導入時の実態調査において、「段落相互の関係を答える記述式の問題」及び、「比べる事柄の中心を明らかにしながら自分の考えをまとめる問題」では、中心となる語や文を正しく捉えることができず、誤答になってしまう児童が多く見られた。そこで、段落相互の関係を図式化してまとめ、和と洋を比較して紹介する学習課題が必要であると考えた。

(2) 教材観

本単元では、「目的に応じて、比較する事柄の中心となる語や文を捉え、段落相互の関係を明らかにしながら、調べて分かったことを自分の考えに生かす」ことをねらいとする。ここでいう目的とは、日本文化の中にある和と洋について図式化してまとめ、3年生に紹介するプレゼンテーション資料を作成することである。日本文化の中にある和と洋を紹介するために、児童は関連する本や資料を選び何度も読み返すこと

になる。中心となる語や文を捉え、段落相互の関係を明らかにしながら読んだことを図式化してまとめることで、論理的に思考し表現する能力の育成につながると考えた。

(3) 指導観

指導に当たっては、単元の導入において、和と洋を比較した教師の言語活動モデルを提示することにより学習の見通しをもたせる。また、和と洋の関連書籍を置き、言語環境を整える。次に、和と洋の対比関係を捉えた文章構成が理解できるように、中心となる語句や文を押さえていく。そして、学習した文章構成を生かし、和と洋を比較するプレゼンテーションを作成し、自分の考えをまとめる。分かりやすい説明になるように同じグループによる交流だけでなく、異なるグループによる情報交換を行う。まとめとして、日本文化のよさについて、3年生にタブレット端末を使い紹介する。交流する活動を通して、自己評価を高め、学習活動への振り返りや励みになるようにする。

(4) 主題に迫るための手立て

ア 付けたい力を明確にした予想される児童の表現例に基づくモデルの作成及び評価のポイントの明示について

段落相互の関係を図式化した言語活動モデルを作成し、比較する事柄の中心となる語や文を捉えることや、段落の内容に関連する写真を活用することなど、対比関係を捉えるための評価のポイントを明示する。

イ 評価のポイントに基づく評価結果を踏まえた指導の工夫について

(ア) 指導と評価の一体化

指導と評価の一体化を目指した学習活動の充実を図るために、第1次で診断的評価によって付けたい力を明確にし、第2次で形成的評価として段落相互の関係を図式化して読む力の育成を図り、第3次で総括的評価として、第2次で育成した読む力を確かなものにするために自分の考えをまとめ交流する活動を設定する。

(イ) 「読む力確認テスト」を通して付けたい力を明らかにする活動

付けたい力に関する児童の実態を把握し、重点的に指導すべき事項を明確にするために診断的評価として、第1次に「読む力確認テスト」を実施する。

(ウ) 資料を活用しながら和と洋を比較して3年生に紹介する活動

第1、2次で育成した読む力を確かなものにするために、和と洋の対比関係について、自分の考えをプレゼンテーション資料にまとめて3年生に紹介する活動を設定する。

4 単元の指導計画（11時間扱い）

第1次 和と洋について図式化してまとめ、比較する文章を作成する学習活動について見通しをもつ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1時間

第2次 文章構成図作りや意味段落ごとの内容を図式化することで、文章全体の構成を捉える。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5時間

時	学習内容・活動	観点別評価規準
1	文章全体を読んで、意味段落に分け、自分の考えについて理由を明らかにする。	文章のまとまりごとに内容を考えて意味段落に分け、自分の考えをもって、グループの話合い活動に参加している。 (国語への関心・意欲・態度)

2	文章構成図について、学級全体で話し合い、意味段落の見出しを決める。	話し合い活動を通して、文章全体の構成について考え、意味段落ごとの見出しを自分の言葉でまとめている。(読む能力)
3	中心となる語句や文を捉え意味段落の内容を図式化し、グループごとに検討する。	和と洋の対比関係を考えながら、中心となる語句や文を見付け、ノートに図式化している。(読む能力)
5 本時	文章全体の関係を考えて、和室と洋室のそれぞれの良さについてまとめる。	和室と洋室のそれぞれの良さについて、使い方と過ごし方の面から対比関係を捉えて、文章でまとめている。(読む能力)

第3次 関連する本や資料を活用しながら、和と洋の違いについてプレゼンテーションにまとめ、3年生に紹介する。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5時間

5 本時の学習

(1) 目標

文章全体の関係を考えて、和室と洋室のそれぞれの良さについて、使い方と過ごし方の面から対比関係を捉えて、文章でまとめることができる。

(2) 準備・資料

電子黒板、電子黒板用マーカー、ホワイトボード

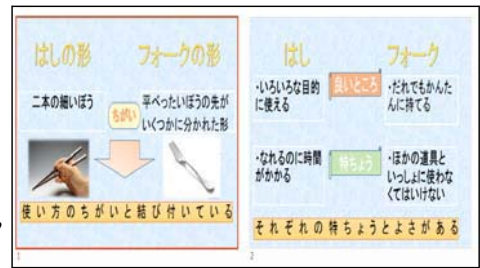
(3) 展開

学習活動・内容	指導上の留意点・評価
1 前時までの学習内容を確認する。	・電子黒板で段落相互の関係を図式化したモデルを提示し、中心となる語や文を確認し学習内容の定着を図れるようにする。
2 本時の学習課題を確認し、学習の見通しをもつ。 文章全体の構成を考えて、和室と洋室のそれぞれの良さについてまとめよう。	・課題となる教科書の該当部分を示すことで、文章構成を再度確認する。 ～課題となる教科書の該当部分～ 「このように見てくると、和室と洋室にはそれぞれの良さがあることが分かります。」
3 和室と洋室のそれぞれの良さのキーワードについて確認する。 ～キーワード～ ・すごし方 (いろいろなしせい、人と人の間かく) (長時間、つかれ、次の動作) ・使い方 (何をするかはっきり、使いやすく) (いろいろな目的)	・電子黒板にキーワードを示すことで、学習内容を捉えられるようにする。 ・電子黒板に注目させることで「このように」が指す内容の範囲が答えのヒントであることに気付かせる。 ・前時のノートの内容を見直すことで、まとめてきた文章構成図の中にキーワードが含まれていることに気付かせる。
4 和室と洋室のそれぞれの良さについて、グループで交流し、意見をホワイトボードにまとめる。 ～考え方の手順～ ① これまでの学習から和室と洋室では使い方と過ごし方の二つから違いがあることを確認する。 ② 過ごし方では二つずつ、使い方では一つずつ良さが述べられていることを確認する。 ④ キーワードを確認しながら、文と文のつながりを考えて、自分の言葉で説明する。	・考え方の手順を明らかにすることで、学習内容の理解を深められるようにする。 ・電子黒板用マーカーを使うことで、着目する点が明らかになるようにする。 ・キーワードをつなぐ言葉も確認できるようにする。 ～キーワードをつなぐ言葉～ ・これ(それ)に対して、また、一方では、等
5 学習グループの代表者が意見を発表し、学級全体で交流する。	◎和室と洋室のそれぞれの良さについて、文章でまとめている。(発表の様子)
6 自分が最も良いと考えたグループの意見を決める。	・理由を明らかにして自分の意見を決めることで、考えが深まるようにする。
7 学級全体で決めた考えを教師が発表し、学習のまとめとする。	・学級全体で考えを共有し、本時の学習を振り返ることができるようにする。

6 授業の実際

(1) 付けたい力を明確にした予想される児童の表現例に基づくモデルの作成及び評価のポイントの明示について

第1次では、和と洋の対比関係を捉えた文章構成が理解できるように、「読む力確認テスト」で使用した文章「はしとフォーク」の資料1 「読む力確認テスト」の文章を図式化したモデル



中心となる語句や文を押さえ、段落相互の関係を図式化したモデル（資料1）を提示した。児童はこのモデルを活用し、教材文「くらしの中の和と洋」を意味段落に分けた際に使用した写真をノートに貼りながら、資料2のように和と洋の対比関係を整理することができた。第2次のまとめでは、文章全体の構成を考えて、対比関係を捉える力が付いたか確認した。具体的には、和室と洋室のそれぞれの良さについて、使い方と過ごし方の面から対比関係を捉えて、300字前後で文章にまとめる活動に取り組んだ。その際、前時の学習で児童がノートにまとめた和室と洋室の良さを表すキーワードや写真を使って、和室と洋室の対比関係を「すごし方」と「使い方」の視点から捉えて図式化したモデル（資料3）を作成し、文章でまとめる際の評価のポイントを示した。児童はモデルを参考にしながら、「まとめ」と「具体例」というような段落相互の関係を考え、和室と洋室の対比関係を説明する文章をまとめることができた。

資料2 段落相互の関係を図式化したノート



以上のように、キーワードや写真を活用してモデルを作成し、和と洋の対比関係を捉えるための評価のポイントを示したことは、児童が論理的に思考し、表現する能力を育成する上で有効な手立てであったと考える。

資料3 和室と洋室の対比関係を図式化したモデル



(2) 評価のポイントに基づく評価結果を踏まえた指導の工夫について

ア 指導と評価の一体化

指導と評価の一体化を目指した言語活動の充実を図るために、図1のような過程で指導と評価を行った。第1次では、診断的評価として教師が作成した「読む力確認テスト」を実施し、児童に付けたい力を明確にした。第2次では、形成的評価として教材文の学習を通して、段落相互の関係や中心となる語や文を明らかにして、読む力の育成を図った。第3次では、総括的評価として、第2次で育成した読む力を確かなものにするために、和と洋の対比関係について自分の考えをまとめ、交流する活動に取り組んだ。これにより、付けたい力を教師と児童が共有して課題に取り組むことができたと考える。

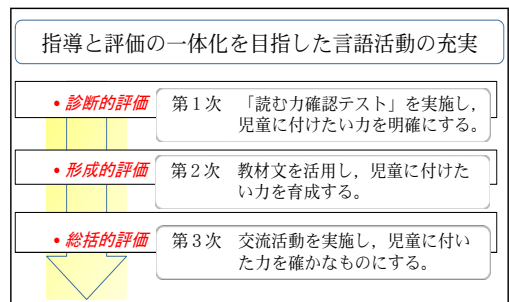


図1 指導と評価の一体化

イ 「読む力確認テスト」を通して身に付けたい力を明らかにする活動

児童の読む力を把握するために「読む力確認テスト」を行った。教師が問題を作成して実施することで、児童の実態を把握し、重点的に指導すべき事項が明確になった。また児童はテストに取り組むことで、単元で身に付ける力を知ることができた。これにより、児童はどのような力を付けていくか学習の見通しをもって取り組むことができたと考える。

ウ 資料を活用しながら和と洋を比較して3年生に紹介する活動

資料4は、第1, 2次で学んだ読みの力を生かして自分の考えをまとめる活動である。第1, 2次を通して、文章全体の構成を考えて、対比関係を捉える力を育成した。第1次の「読む力確認テスト」は児童の課題を明らかにする診断的評価であるとともに、第2, 3次で付けていく力を示すことにつながった。資料4の児童は、第1, 2次で学んだ具体例からまとめとする文章構成及び対比関係を捉える力を生かして、第3次で自分の考えをプレゼンテーション資料にまとめている。第1次のはしとフォークの特徴と良さの対比関係を捉える力を使い、第3次のそばとスパゲッティーの特徴と良さの対比関係をまとめる際に生かしている。具体例も枠で囲むなどして、構成を考えて和と洋の対比関係を明らかにしている。「食べ方にはよさと特ちょうがある」というまとめの文は、第1次のまとめ方を活用している。これらの活動を通して、論理的に思考し表現する能力の育成が図られたと考える。

資料4 学んだ読みの力を生かして、考えをまとめる活動

ま と め	具 体 例
と良さがあ りま す。	てはな りませ ん。
クには、 このよ うに、 はしと フォ ーク	の道具 といっ しょに 使わ なく
	ナイフ やス プ ー ン な ど、 ほ か
	物をさ すた めの もの なの で、 食 べ
	かんた んに 持て ます が、 食 べ
	はにぎ るだ けな ので だれ でも
	りま すが、 (中 略)、 フォ ー ク
	ので、 なれ るの に時 間が か か つ
	はしは 二本 いっ しょ に持 つ

文章全体の構成を考えて、対比関係を捉える力を育成（読む力確認テスト）

そば	スパゲッティー
・短時間で食べられる	・食べる音などを立てないから静かに食べられる
よさ	よさ
←	→
・そばを冷ましためずって食べる	・とろみがあるソースを麺に絡めて食べる
特ちょう	特ちょう
食べ方にはよさと特ちょうがある	

対比関係を捉える力を生かしてプレゼンテーション資料を作成（児童作品）

7 成果と課題

(1) 成果

単元終了後に実施した「読む力確認テスト」の結果からは、比較する事柄を捉える問題、比較したことから自分の考えをまとめる問題ともに正解した児童の人数が、事前よりも増えたことがうかがえた。これは、第1次の診断的評価で児童の課題を明確にし、第2次で指導すべき事項を明らかにして取り組み、第3次で、目的意識をもって身に付けた読みの力を活用できたことによる。指導すべき事項を明らかにしたことで、論理的に思考し表現する能力が育成された。

(2) 課題

「読む力確認テスト」で、児童が身に付けた力に対してより客観的な評価ができるようになった。しかし第3次の自分の考えをまとめる活動に対する評価では、児童のテーマが多様であったため、評価規準の客観性や評価方法に課題が残った。言語活動を行う際に、どのような評価方法で何を規準とするか研究していきたい。

【授業研究2】

小学校第6学年「立松和平氏のいのちシリーズ作品を本のショーウィンドウでおすすめしよう」における論理的に思考し表現する能力を育む国語科学習指導と評価

一言語活動の充実を図り、自他の読み方を交流する学び合いの授業づくりを通してー

1 単元名 立松和平氏のいのちシリーズ作品を本のショーウィンドウでおすすめしよう

2 単元の目標と観点別評価規準

- 物語に興味をもち、物語が自分に最も強く語りかけてきたことを考えながら読み、本のショーウィンドウで伝えたりしようとする。 (関心・意欲・態度)
- 優れた叙述に着目しながら中心人物の心情の変化を読み取り、物語が自分に最も強く語りかけてきたことを捉え、本のショーウィンドウにまとめることができる。 (読むこと)
- 文や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。 (読むこと)
- 文や文章にはいろいろな構成があることや比喩表現について理解することができる。 (伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
物語に興味をもち、物語が最も強く語りかけてきたことを考えながら読み、本のショーウィンドウで伝えたりしようとしている。	物語を本のショーウィンドウにまとめるために、優れた叙述に着目しながら中心人物の心情の変化を読み取り、物語が自分に最も強く語りかけてきたことをまとめている。また、物語を読んで、共通点や相違点を明らかにし、そこから自分の考えを広げたり深めたりしている。	文や文章のいろいろな構成や比喩表現について理解している。

3 単元の指導について

(1) 児童観 (平成26年7月1日実施 調査人数30人)

本単元の学習に関する意識調査では、本を読んで友達に紹介する際には、主に表現や叙述を中心に伝えたいという意見が多数を占めた。児童の読む力に関して、平成25年度県学力診断のためのテストの「文脈に即して心情を読み取る力」の設問の正答率は、56.6% (県平均65.8%) であった。また、「人物の相互関係に基づいた行動や会話、情景などを通して心情を捉える力」の設問の正答率は、23.3% (県平均49.8%) であった。テストの結果から、叙述に着目して登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を的確に捉えた上で、自分の考えをもつことに課題があることが分かった。そこで、物語を友達に推薦する際、叙述に着目し、登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を的確に捉えた上で、作品が自分に最も強く語りかけてきたことにつ

いて論理的に思考し、表現することができるような能力を育成したいと考えた。

(2) 教材観

本教材「海のいのち」は、構成が「設定・展開・山場・結末」という基本的な四つの部分からできており、場面の情景も児童にとって理解しやすくなっている。物語は、中心となる人物である太一を軸に展開する。太一は父や与吉じいさなど、周りの人物とのかかわりの中で成長していく。人物と人物がどのようにかかわっているか、それが物語全体にどのように影響するのかに着目させ、直接的な表現だけでなく暗示されている事柄を押さえながら、人物の心情を深く読み取ることができる作品である。また、並行読書教材として扱う「山のいのち」は、立松作品の「いのちシリーズ」の中で「海のいのち」に作風が最も近く、場面ごとに比べ読みがしやすい作品である。本研究では、読む時の視点として、登場人物、出来事、言葉、描写などを掲げ、文章から共通点と相違点を見付けさせる。二つの物語の共通点から、物語が自分に強く語りかけてきたことを読み取り、発表し合うという交流を通して、児童一人一人の論理的に思考し表現する能力を育みたいと考えた。

(3) 主題に迫るための手立て

ア 付けたい力を明確にした予想される児童の表現例に基づくモデルの作成及び評価のポイントの明示

重点指導事項を明らかにしたマトリックス型言語活動系統表を基に、教師が本のショーウィンドウのグッドモデルを作成し、物語が最も強く語りかけてきたことをまとめるための評価のポイントを明示する。

イ 評価のポイントに基づく評価結果を踏まえた指導の工夫

児童が自分の考えを深めたり広げたりすることができるよう、「山のいのち」との比べ読みや作者の実際の声を聞く活動の前後にワークシートを用いた自己評価を取り入れ、自分の読みの変容を本のショーウィンドウに記入させる。さらに、より多くの人の意見や感想と比較するために、相互評価やオーディエンス評価を取り入れる。

4 単元の指導計画（10時間扱い）

第1次 学習課題を設定し、単元の見通しをもつ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2時間

第2次 「海のいのち」を「山のいのち」と比べて読み、パビリオン形式で発表するための本のショーウィンドウにまとめる。・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6時間

時	学習内容・活動	観点別評価規準
1	登場人物の相互関係や心情について読み取り、登場人物についてまとめる。	登場人物の相互関係や心情をとらえている。(読む能力)
2	表現の仕方や物語の構成をとらえて「魅力ある場面」についてまとめる。	六場面から魅力ある場面を選び、その場面と理由を書いている。(読む能力) 物語の構成をとらえている。(言語についての知識・理解・技能)
3	「キャッチコピー」を考え、まとめる。	作品の中で印象に残る文を書き出し、「キャッチコピー」を書いている。(読む能力)
4	「物語が最も強く語りかけてきたこと」に対して、自分の考えをまとめる。	「物語が最も強く語りかけてきたこと」に対して自分の考えをまとめている。(読む能力)
5 時	「物語が最も強く語りかけてきたこと」とは何かを話し合い、自分の考えをまとめる。	「物語が最も強く語りかけてきたこと」とは何かを話し合い、自分の考えを深め、まとめている。(読む能力)
6	「おすすめの言葉」を話し合い、自分の言葉でまとめる。	「おすすめの言葉」を話し合い、自分の言葉でまとめている。(読む能力)

第3次 立松和夫氏「いのちシリーズ」から本を選び、その本を推薦するための本のショーウィンドウを作る。・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2時間

5 本時の指導

(1) 目標

「海のいのち」と「山のいのち」を読み比べて、「二つの物語が最も強く語りかけてきたこと」とは何かを話し合い、自分の考えを深めて本のショーウィンドウにまとめることができる。

(2) 準備・資料

挿絵，ワークシート，短冊カード，学習計画表（振り返りカード），CDラジカセ，作者の声が入ったCD

(3) 展開

学習活動・内容	指導上の留意点・評価
1 学習のウォーミングアップをする。 ・「海のいのち」の新出漢字練習	<ul style="list-style-type: none"> ・前面に掲示してある漢字短冊を指しながら読み，漢字を読む力を高められるようにする。 ・口の開け方，声の大きさなどを確認する。
2 本時の学習課題を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 「海のいのち」と「山のいのち」を読み比べて，物語が最も強く語りかけてきたことについて考えよう。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・学びのノートやワークシートを基にした話し合いで意見を交流させながら，本時の学習内容や付けたい力について確認し，学習への意欲を高められるようにする。 ・題材を強く意識させる出来事や言葉，描写などに着目すれば課題解決につながることを確認する。
3 読みの視点を確認する。 ・登場人物・出来事・言葉・描写	<ul style="list-style-type: none"> ・「物語が最も強く語りかけてきたこと」を強く意識させる出来事や言葉，描写に着目して読むよう指示する。
4 「海のいのち」の文で自分が一番心を打たれた部分を音読する。	
5 「山のいのち」と比べ読みをして共通点や相違点を確認する。 〈相違点〉 ・海と山 ・父親の存在 ・育ってきた環境・自然との出会い ・長い時間での姿と一夏の体験の姿 〈共通点〉 ・題名 ・男の子とおじいさん ・自然の中 ・生と死 ・「千匹に……生きていけるよ。」 ・「あれも……まわっているんだよ。」	<ul style="list-style-type: none"> ・先に相違点を出し，次に共通点を出すようにして，「物語が最も強く語りかけてきたこと」にスムーズに入れるようにする。 ・相違点の中に，言葉は違っているが共通する意味があるということを知らせる。 ・共通点から，「物語が最も強く語りかけてきたこと」を見付けるよう指示する。 ・共通点や相違点について，短冊カードを用意しておき，児童の発表の中になかったものに関しては，教師側から提案できるようにしておく。
6 「海のいのち」「山のいのち」で「物語が最も強く語りかけてきたこと」について自分の考えをまとめる。 (1) グループで話し合う。 (2) 一斉で話し合う。 (3) 「物語が最も強く語りかけてきたこと」について自分の考えをまとめる。 ・自然と向き合い，自然の恵みにつねに感謝を忘れず，祈るような気持ちで生きることが私たち本来の生き方。 ・自然は父であり，母である。自然を殺してしまつては，人は絶対に生きることはいできない。	<ul style="list-style-type: none"> ・児童主体（児童司会）で交流するように指示する。 ・話し合い活動が活発にできるように，事前にワークシートに自分の考えを書かせておくようにする。また，児童が自信をもって発言できるよう，教師はワークシートにコメントを入れておく。 ・自分の考えに自信をもてるよう，討論に入る前にグループでの話し合いを取り入れる。 ・グループの話し合いをしながら自分の考えについて変容がある場合には加除修正するよう指示する。 ・根拠となる言葉を明確にしなが，具体的に「教科書の……の言葉からこう考えました。」というように，自分の言葉で表現させたい。また，友達の良いところを見付けながら聞かせたい。 ・自分の考えと友達の考えを関連付けながら，発表するように指示する。 ・友達の意見を尊重し，話し合うことができるように助言する。 ・まとめることが困難な児童に対しては，交流の中で友達から意見を参考にして書くように助言する。 ・自分の考えがどのように変わったのか確かめながらワークシートにまとめるよう声をかける。
7 「作者 立松和平氏」の声を聞く。	
8 「物語が最も語りかけてきたこと」について本のショーウィンドウに書き入れる。	<ul style="list-style-type: none"> ・作者の声を聞くことで，作者の「いのち」に対する思いを知り，深く味わうことができるようにしたい。 ・作者の声を聞くことでさらに深まった「物語が最も強く語りかけてきたこと」について本のショーウィンドウにまとめる。その際，それに対する自分なりの考えも入れることを伝える。 ・完成した児童の作品を紹介する。 ◎「海のいのち」と「山のいのち」を読み比べて，「物語

9 本時のまとめをし、次時の課題を知る。

おすすめする文章について考え、本のショーウィンドウにまとめよう。

が最も強く語りかけてきたこと」とは何かを話し合い、自分の考えを本のショーウィンドウにまとめている。
(本のショーウィンドウ・発表)
・本時の課題の達成や分かったことは何かなど振り返りカードに記入するよう指示する。
・次時の課題を学習計画表で確認し、学習意欲を喚起できるようにする。

6 授業の実際

(1) 付けたい力を明確にした予想される児童の表現例に基づくモデルの作成及び評価のポイントの明示

本単元では、児童が選んだ立松作品の魅力を作成した本のショーウィンドウを使い、パピリオン形式で同学年の友達や4年生、5年生の児童に推薦することを位置付けた。教師が資料1のような言語活動のグッドモデルを提示したことで、物語が最も強く語りかけてきたことをまとめるための評価のポイントが明確になった。また、平成26年度全国学力・学習状況調査の記述問題を参考に、130字以上150字以内で読んだことを書くという条件を付けたことで、発達の段階に応じた表現する力で自分の考えをまとめることができた。児童にとって、本のショーウィンドウを作成して推薦するという言語活動の過程が課題解決の過程となり、論理的に思考し表現する能力が育まれる学習になったと考える。

資料1 教師作成の言語活動グッドモデル



(2) 評価のポイントに基づく評価結果を踏まえた指導の工夫

ア 思考の変容を可視化するためのワークシート

授業で使用したワークシート（資料2）については、まず、物語が最も強く語りかけてきたことについて自分の考えを記した。その後、グループでの話し合いや全体での交流の時には、自分の考えをまとめた。そして、作者の声を聞いて広がったり深まったりした自分の考えを、資料2で示したワークシートの囲みの部分に記入した後、本のショーウィンドウにまとめた。児童は自分の思考の変化を可視化できるため表現する能力も高まったと考える。

資料2 思考の変容を可視化するためのワークシート



イ 自己評価

自己評価カードを作成し評価させた。授業内で使うワークシートでは身に付けさ

せたい能力の習得状況を言語活動を通して児童自らが評価できるような工夫をした。また、学習計画表に自己評価欄を設け「学習してできるようになったこと・分かったこと・がんばったこと」を書き入れるようにした。これらの取組により、児童は「身に付いた力」の視点から学習を振り返ることができるようになった。

ウ 相互評価

言語活動の取組を相互評価した。言葉での発表やパビリオン型の発表の際は、自分の言葉で友達のよかったところや「自分はこう思う。」ということ述べた。本のショーウィンドウに対しては、付箋紙を活用し相手の文章のよいところをどんどん書き出して添付していった。友達の言語活動に対し、思考し、話したり書いたりして伝える表現力が高まった。評価する側は、友達の作品を手に取り読むことで、自分の作品と比較して評価することができ、評価される側は、学級の友達の意見や感想を聞くことで新たな自分の考えをもつことができた。

エ オーディエンス評価

廊下に本のショーウィンドウの児童作品コーナーを設けて展示し、オーディエンス（参観者）にコメントを書いて添付してもらった。コーナーには授業者からのお知らせも展示し、評価についての説明をした。また、付箋紙や鉛筆などを用意して、誰もが評価しやすい環境を整えた。本校の教師や他学級の児童にも呼びかけたり、学習参観時は事前に連絡をして、来校した際にコメントを書くことをお願いしたりしたことで、結果的に多くの方々に評価をしてもらうことができた。児童はコメントの内容に興味をもち熱心に読み、さらに思考を深めていくことができた。これにより、児童一人一人の論理的に思考し表現する能力を育むことができたと考える。

7 成果と課題

(1) 成果

日常生活に必要とされる様々な言語活動を工夫し、その充実を図ることで、日常生活に必要な基礎的な国語の能力が身に付き、論理的に思考し表現する能力を育むことができたと考える。そして、「表現する能力」を育むプロセスにおいて、文章をしっかり読むことができ、「読む力」も高まってきたと考える。また、学び合いにおける自らの言語活動を振り返る活動として、様々な評価方法を取り入れた結果、相手の考えをよく聞き、自分の考えを広げたり深めたりしてまとめる力も育ってきた。自分で振り返り、相手に認めてもらい、さらに、他の人にも称賛や言葉かけをされるということは学習への励みにもつながった。教師が言語活動のグッドモデルを作成して評価のポイントを明示し、計画的に細かく評価を取り入れることで指導と評価の一体化が図られ、児童一人一人の論理的に思考し表現する能力が確実に向上したと考える。

(2) 課題

これからも一人一人の言語能力が高まっていくことが重要であると考えているが、その際には、ティームティーチングや習熟度別指導など、集団で学ぶ中にも個に応じた指導が更に望まれることになるだろう。児童の実態に応じて学校で系統化した言語活動の見直しを図り、一人一人の論理的に思考し表現する能力の向上を図っていきたい。

【授業研究3】

中学校第3学年「意見交流会を開こう」における論理的に思考し表現する能力を育む国語科学習指導と評価 －指導と評価の一体化を図ったスパイラル型の学習を通して－

1 単元名 二つの文章を読み比べて意見交流会を開こう「テクノロジーとの付き合い方」
「テクノロジーと人間らしさ」

2 単元の目標と観点別評価規準

- さまざまな文章について関心をもって読み、自分の考えをもととする。
(関心・意欲・態度)
- さまざまな文章について、論の進め方や内容について読み、自分の考えをもつことができる。
(読むこと)
- 語句の効果的な使い方や表現上の工夫を理解することができる。
(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
テクノロジーに関する文章を進んで読み、自分の考えをもととしている。	文章を読み比べて、それぞれの文章の書き方や内容について評価しながら読んでいる。	語句の効果的な使い方や表現上の工夫を理解している。

3 単元の指導について

(1) 生徒観 (平成26年6月6日実施 調査人数20人)

「筆者の論の進め方の読み取り」と「筆者の考え方について自分の考えをもつ」ことについて、実態調査を行った。その結果、筆者の論の進め方を問う問題では、正答率が50%に達しない生徒は12人いた。また、筆者の考え方について自分の考えを記述する問題でも、正答率が50%に達しない生徒は12人いた。結果を分析すると、筆者の論の進め方が捉えられないために、自分の考えが定まらない生徒と、考えの表現方法に課題がある生徒が多いことが分かった。そこで、筆者の論の進め方を捉える方法や読み取ったことを表現する方法を復習させたり、学習の結果に課題が残る生徒には、再度の学習を通して、身に付けさせたい力である「二つの文章を読み比べ、構成や展開、表現の仕方について評価し、自分の意見をもつこと」を習得できると考えた。

(2) 教材観

生徒は、第2学年「恥ずかしい話」において、筆者の論の進め方の工夫を捉えたり、内容について自分の考えをもったりする学習を行ってきた。本単元では、「テクノロジーとの付き合い方」、「テクノロジーと人間らしさ」というテクノロジーに関する文章を二つ取り上げる。身に付けさせたい力を「二つの文章を読み比べ、構成や展開、表現の仕方について評価し、自分の意見をもつこと」とし、この二つの文章を読み比べて評価する方法を習得し、さらに活用する力を身に付けることをねらいとする。

(3) 指導観

本単元では、身に付けさせたい力を付けるための言語活動として、「情報を比較して読み、考え、意見交流会を開く」を通して指導し、学習過程の中に生徒の課題解決の過程を組み入れる。また、1時間ごとの評価を次時以降の個別指導に生かすため、習得と活用を繰り返す単元の流れを工夫して構成する。評価は、使用する学習プリントに直接助言を書き込んだり、主張・根拠・まとめなどの文章構成を色別カード式の原稿用紙を活用して書かせるなどして、丁寧に行う。そして、次時の学習の手立てを講じ、指導と評価の一体化を目指すことにより、本単元の目標達成を目指す。

(4) 主題に迫るための手立て

ア 評価を次時の指導に生かす指導の工夫

毎時間の評価を次時に生かす指導を工夫し学習のつまずきをなくすため、身に付けさせたい力の習得と活用を繰り返すスパイラル型の単元構成にし、付けたい力と生徒の実態に合わせた言語活動を設定する。第1次では、本単元のゴールとして二つの文章を読み比べて考えたことについて意見交流会を開くことを伝え、単元の見通しをもたせるとともに、学習計画表に意見交流会に向けた自分のめあてを書かせ、文章をしっかり読み取る意欲を最後まで持続できるようにする。めあてには「自分の意見をもつために文章をよく読み取る。」、「文章を正確に読み取って、意見文が書けるようにする。」、「意見交流会で自分の意見をはっきりと話せるようにする。」などがあつた。

イ グッドモデルを活用した指導の工夫

第2次の第3時では、教師が社説を読み取って意見文を書き、グッドモデルとして生徒に提示する。その際、社説のプリントと意見文とで、同義の箇所には同じ色を付け、対応が一目で分かるようにしておく。また、第4時の導入部では、第3時で書いた生徒の意見文の拡大コピーをグッドモデルとして全体に提示する。

ウ 生徒同士の相互評価を学習に反映させる場の工夫

第2次の第4時では、意見文を書いた後に校正をする時間を設ける。主張の立場が同じである3人グループをあらかじめ編成し、互いの意見文を読み合っけて評価し、校正に生かせるアドバイスを付箋に書いて貼る。具体的には、評価の観点を「内容」と「構成」の二つに絞り、それぞれ違う色の付箋を使用する。

4 単元の指導計画（6時間扱い）

第1次 単元の最後に意見交流会を開くことや、そのために学習する内容を知る。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1時間

第2次 二つの文章の論の進め方や内容を読んで比較し、自分の考えをもつ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4時間

時	学習内容・活動	観点別評価規準
1	新聞の社説を利用して、二つの文章の論の進め方を比較する方法を習得する。	主張や事実と意見など、論の進め方を比較する方法を理解している。 (読む能力) 語句の効果的な使い方や表現上の工夫を理解している。 (言語についての知識・理解・技能)
2	習得した方法を活用して「テクノロジーとの付き合い方」、「テクノロジーと人間らしさ」を読み、	論の進め方に着目して読み、比較をしている。 (読む能力)

	比較をする。	語句の効果的な使い方や表現上の工夫を理解している。 (言語についての知識・理解・技能)
3	新聞の社説を利用して、読んで考えたことを表現する方法を習得する。	読んで考えたことを表現する方法を理解している。 (読む能力)
4 本時	前時に習得した方法を活用して、「テクノロジーとの付き合い方」、「テクノロジーと人間らしさ」の二つの文章を比較し、読んで考えたことを表現する。	前時までに習得した知識や技能を活用して、読んで考えたことを表現している。 (読む能力)

第3次 友達と交流し合い、感想を述べ合う。・・・・・・・・・・・・・・・・・・1時間

5 本時の指導

(1) 目標

読んで考えたことを表現する方法を活用して「テクノロジーとの付き合い方」「テクノロジーと人間らしさ」の二つの文章を比較し、読んで考えたことを表現することができる。

(2) 準備・資料

前時に生徒が書いたよい例の意見文の拡大版、前時に評価規準に達しなかった生徒用色別カード式原稿用紙、段落分けされた原稿用紙、A・B評価の生徒用原稿用紙

(3) 展開

学習活動・内容	指導上の留意点・評価
1 本時の学習課題を知る。 読んで考えたことを表現しよう。	・意見交流会を開くことが単元のゴールであることや、交流会で発表するために読んで考えたことを表現する方法を習得してきたこと、本時ではそれを活用していくことなどを十分確認し、本時の学習の必要性を周知する。
2 本時の学習活動の見通しをもつ。 ・生徒の意見文を参考に、書き方を想起する。	・前時に友達が書いたよい意見文を使って、書き方を想起する。
3 読んで考えたことを表現する。	・前時に書いた意見文がB評価だった生徒（主張や根拠を示すことはできているが、説得力が充分ではない）には、意見文に文章の構成と内容の改善点を記入して、本時の学習がスムーズに進められるようにする。 ・前時の学習で評価規準に達しなかった生徒（自分の考えが書けない）には、色別カード式原稿用紙を準備する。また、段落分けができなかった生徒には、段落分けされている原稿用紙を準備する。さらに、第2時で本人が読み取ったことや考えたことをあらかじめ確認し、読み取れなかった箇所などに助言を入れることで、自力で表現できる喜びを味わえるようにする。
4 互いの考えを交流する。 ・グループで確認する。	・同じ立場を主張する生徒同士が同じグループになるように、第2時の学習プリントから、あらかじめグループ編成をしておくこと

<p>5 交流を基に再考し、加筆修正する。</p>	<p>で、交流しやすくする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・構成と内容の二つの視点に着目するよう指示する。 <p>評 前時までに習得した知識や技能を活用して、読んで考えたことを表現している。 (意見文の構成や内容)</p>
<p>6 本時の振り返りと、次時の見通しをもつ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習計画表を利用して、本時の振り返りを行う。 ・次時は、本時の学習を生かして意見交流会を行うことを知らせる。 ・意欲をもって本時の学習を行ったことを称賛し、満足感を味わえるようにすることで、さらに次時への意欲を喚起する。

6 授業の実際

(1) 評価を次時の指導に生かす指導の工夫について

第1時では、新聞の社説を使用して、二つの文章の論の進め方を比較する方法を習得させた。そして、第2時では、その方法を活用して本文の読み取りを行った。従来の単元構成では、1時間の中で、習得と活用の両方を行い、次時はまた新しい内容を学習するため、評価を次時に生かして指導をすることができなかった。そこで、第1時を習得、第2時を活用に充て、第1時での習得が不十分な生徒を把握し、ほとんどの生徒がプリントの記入が難しかったことを受けて、第2時のプリントは、二つの文章を比べるポイントがよく分かる形式にする。これにより、第2時の本文の読み取りはスムーズに行うことができた。同様に第3時に習得、第4時に活用を行い、第3時で十分習得できなかった生徒には、第4時で段落分けをした原稿用紙や、項目で色分けされたカードを使用し、個別の対応を工夫する。その結果、第4時では、全員が読み取ったことを基に自分の考えを書くことができた。

本実践の後、生徒の学力の変容を見るため、「筆者の論の進め方を読み取ること」と「筆者の考え方について自分の考えをもつこと」について、再度実調査を行った。その結果、図1のように「論の進め方の読み取り」では、実践前と比べて正答率100%の生徒は3人、75%は2人、50%は1人それぞれ増えた。一方、正答率25%以下の生徒は7人から1人だけとなった。また「自分の考えをもつ」ことは、図2のように実践前と比べて正答率100%の生徒が8人増えた。一方、正答率50%以下や記述なしの生徒は12人から4人だけとなった。

(2) グッドモデルを活用した指導の工夫について

第3時で、教師が社説に対する意見文を書き、グッドモデルとして生徒に提示し、教師が読み取ったプリントと意見文で、同義の箇所には同じ色を付け、対応が一目で分かるようにしておいた。これにより、読み取りプリントに書いたことを、どのように意見

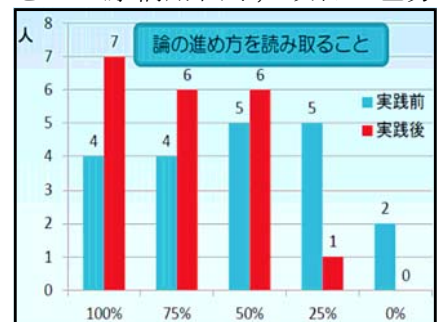


図1 論の進め方の読み取りについての実態調査 (事前調査 平成26.6.6実施 事後調査 平成26.7.17実施 20人)

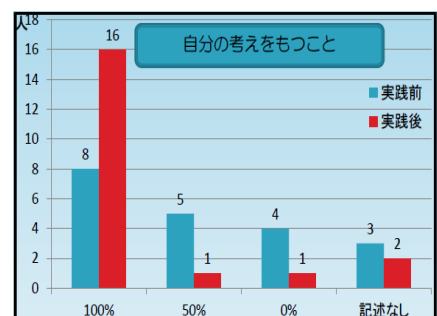


図2 自分の考えをもつことについての実態調査 (事前調査 平成26.6.6実施 事後調査 平成26.7.17実施 20人)

文に反映させるのか、またどのような段落構成にすればよいかを視覚的に学ぶことができた。その後、自分がまとめたプリントを参考にして、意見文を書くことができた。さらに、第4時の導入部で、第3時で書いた生徒の意見文をグッドモデルとして拡大コピーをして提示し、それを参考にして、全員で段落構成や内容について復習をすることができた。また、第3時で使用した教師の意見文を参考にし、第2時のプリントを再構成して本時の意見文を書く生徒も見られた。

(3) 生徒同士の相互評価を学習に反映させる場の工夫について

第4時では、意見文を書いた後に校正をする時間を設けた。主張の立場が同じである3人グループをあらかじめ構成し、互いの意見文を読み合っけて評価し、校正に生かせるアドバイスを付箋に書いて貼った。具体的には、評価の観点を「内容」と「構成」の二つに絞り、それぞれ違う色の付箋を使用する。このような場の設定を通して、友達からのアドバイスをどのように取り入れるかを思考して判断し、加筆修正として表現することができるかを考えさせるようにする。生徒は、大変興味深く友達の意見文を読み、書いた生徒とも相談をしながら付箋を貼っていた。その後、付箋に書かれたアドバイスを基に自分の意見文を加筆修正することができた。

(4) 生徒の意識調査から

本実践の後、生徒の意識の変容をみるための調査を行った。その結果、資料1のように、全生徒が単元の最後まで頑張ることができたという回答をした。このことから、本単元の実践で、意見交流会を開くことを言語活動のゴールとして設定したことが、生徒の意欲を高め、付けさせたい力を付けることにつながったと考えられる。また、前時にBや評価規準に達しなかった生徒に用いた段落分けをした原稿用紙や、

調査内容	はい	いいえ
1 文書の構成や内容について読み取り方が分かったか	18名	2名
2 読み取ったことを自分の考えに生かす方法が分かったか	15名	5名
3 グッドモデルは役に立ったか	17名	3名
4 グループでの意見交流は役に立ったか	18名	2名
5 最後まで意欲をもって頑張ることができたか	20名	0名

資料1 意識調査（平成26. 7. 17実施）

項目で色分けされたカードについては、利用した生徒全員が役に立ったと回答した。

7 成果と課題

(1) 成果

ア 前時に習得したことを次時に活用することを単元を通して繰り返すことで、全員が読み取ったことを基に自分の考えを書くことができた。

イ グッドモデルとして提示された、教師が書いた意見文や他の生徒の意見文の拡大コピーを参考にして、全員が意見文を書くことができた。

ウ 他の生徒の意見文を読んで評価したことを、「内容」と「構成」の二つに絞り付箋を用いて伝え合うことで、全員が意見文を加筆修正することができた。

(2) 課題

本研究では、習得と活用を繰り返すスパイラル型の単元構成の中で、1時間ごとの評価を次時の指導の手立てに役立てることを主に工夫してきたが、評価規準に達しなかった生徒に対する手立ての有効性については課題が残る。今後は、その生徒達の実態に寄り添った有効な手立ての工夫について、更に研究していきたい。

【授業研究 4】

高等学校第2学年「『ふしぎ』ということ」における論理的に思考し表現する能力を育む国語科学習指導と評価
－批判的な読みを身に付けさせるための授業づくりとその評価を通して－

1 単元名 論理的文章の論理性を評価しよう「『ふしぎ』ということ」

2 単元の目標と観点別評価規準

- 文章を読んで構成、展開、要旨などを的確に捉え、その論理性を評価しようとする。
(関心・意欲・態度)
- 文章を読んで構成、展開、要旨などを的確に捉え、その論理性を評価する。
(読む能力)
- 語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、文体や修辞などの表現上の特色を捉える。

(知識・理解) (伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
文章に表れている書き手の考えの筋道の通し方などを、構成、展開の仕方や、要旨の伝え方などの点から分析・考察し、その価値を判断しようとしている。	文章に表れている書き手の考えの筋道の通し方などを、構成、展開の仕方や、要旨の伝え方などの点から分析、考察し、その価値を判断している。	書き手が自分のものの見方、感じ方、考え方を、より効果的に表現しようとする用語の選択について理解し、それぞれの視点から、表現の特色を捉えている。

3 単元の指導について

(1) 生徒観 (平成26年4月9日実施 調査人数35人)

評論文の読解問題において、本文の全体主旨を捉える問題の正答率が40%、本文の要旨を捉える問題の正答率は35.7%であった。また、学習方法に関する調査結果では、「評論文は本文の全体像をつかむようにする」との回答が、24人であった。これらの結果から、評論文の読解方法について、全体像をつかもうという意識はあるものの、要旨を的確に把握することができていないと考える。

(2) 教材観

第1学年では、国語総合において「水の東西」(山崎正和)、「日本語万華鏡」(鈴木孝夫)などの論理的文章を学習している。本単元では、自分の生活体験と関連させ、批判的な読みの交流を経て理解や解釈を深め、それを基に自分の考えをもつことを目指すが、本教材は、生徒自身が「ふしぎ」に思っている日常的な体験と関わる話題をきっかけにして、自分の生活体験と関連させながら、文章の論理性を評価することができるので、目標を達成するのに適した教材であると考えられる。

(3) 指導観

本単元では、まず、「ふしぎ」に思うという日常的な体験と関わる話題をきっかけに、自分の生活体験と関連させることで問題意識をもたせる。次に、核心的な論理

(対比・言い換え・媒介)を用いて、接続表現等に注意しながら文章構成図を作成することで主題、結論に迫り、それを交流することで要旨の捉え方について考えを深める。以上の過程を経て、批判的な読みの交流を行い理解や解釈を深め、それを基に構成、展開、要旨などを的確に捉え、その論理性を評価することを目指す。

(4) 主題に迫るための手立て

ア 付けたい力を明確にしたモデルの作成及び評価のポイントの明示

(ア) 付けたい力を明確にした学習評価のポイントの明示

導入時に、単元の評価のポイントを明示したプリントを配付して、付けたい力を明確にし、生徒がより高い評価を目指して課題解決に取り組む契機とする。評価は達成できたレベルの枠に○を記入するだけの簡潔なものとし、次時に確認した際に、課題がすぐに分かるようにする。

(イ) 学習カードを活用した学習評価のポイントの振り返り

実態調査から、小中学校での学習カードの活用率は約7割と高い。本研究においても、第1次から、各時間の学習の目当て、自己評価、学習したことと次時の課題を記入する学習カードを活用し、学習評価のポイントの振り返りを行い、それに教師の助言を加えることで、前時までの評価を踏まえた課題を明確にする。

(ウ) 言語活動の体験を基にしたモデルの作成

教師自身が、教材文を読んで筆者に賛成する視点と筆者に反対する視点を書いた、ワークシートまとめ例を作成し、モデルとして生徒に提示する。

イ 評価のポイントに基づく評価結果を踏まえた指導の工夫

(ア) 批判的な読みを身に付けるための評価の工夫

自分の生活体験を踏まえ、書き手の主題設定、議論の進め方、その答えの妥当性を考え、その結果を自己評価するためのワークシートを活用し、批判的な読みを身に付ける。

(イ) 批判的な読みを交流するための授業づくりの工夫

生徒の学習段階に対応して評価のポイントを明示し、評価結果をチェックするための「課題解決チーム学習の力の段階的な獲得目標チェックリスト」を活用し、批判的な読みを交流する。

4 単元の指導計画（6時間扱い）

第1次 学習計画を立て、自分の生活体験と関連させる。・・・・・・・・・・1時間

第2次 議論の骨格をつかみ、批判的な読みの交流をする。・・・・・・・・・・4時間

時	学習内容・活動	観点別評価規準
1	三つの意味段落のすべてについて、核心的な論理(対比・言い換え・媒介)を視点に議論の骨格を捉え、記号を用いて的確に文章構成を図示し、その文章構成図を基に、主題と結論をまとめる。	書き手が自分のものの見方、感じ方、考え方を、より効果的に表現しようとする用語の選択について理解し、それぞれの視点から、表現の特色を捉えている。 (知識・理解)
2	個人でまとめた文章構成図と主題・結論を4人のチームで交流し、よりの確に議論の骨格を捉える。	文章に表れている書き手の考えの筋道の通し方などを、構成・展開の仕方や、要旨の伝え方などの点から分析・考察し、その価値を判断している。 (読む能力)

3	第2時で捉えた議論の骨格を踏まえ、第1次での自分の問題意識を大切にしつつ、到達目標を明確化した評価のポイントを基に、批判的な読みのために賛成・反対の両方の視点を想像し、書き手の主題設定、議論の進め方、結論の妥当性を考える。	第1次での自分の問題意識を大切にしつつ、到達目標を明確化した評価のポイントを基に、批判的に読み、書き手の主題設定、議論の進め方、結論の妥当性を考えようとしている。 (関心・意欲・態度)
4 本時	個人で読み取ったことを基に、書き手の主題・構成・結論が信頼性のあるものか、賛成・反対の視点的両方を想像し、チームで協力して検証して批判的な読みを身に付ける。	交流したことを生かして、書き手の主題設定、議論の進め方、結論の妥当性についての考えを身に付けることができている。(読む能力)

第3次 自分の考えをもつ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1時間

5 本時の指導

(1) 目標

書き手の主題設定、議論の進め方、結論の妥当性を考え、ワークシートをチームで交流し、「『ふしぎ』ということ」における、書き手の考えを選び取る読み（批判的な読み）を身に付ける。

(2) 準備・資料

学習カード、本時の交流の手引き、学習評価ポイント、ワークシート、付箋、ノート、話し合いに必要な要素、課題解決チーム学習の力の段階的な獲得目標チェックリスト、本文における「物語」、「神話」の定義についての参考資料

(3) 展開

学習活動・内容	指導上の留意点・評価
1 本時の学習課題をつかむ。 交流を通し、「『ふしぎ』ということ」の批判的な読みを身に付ける。	<ul style="list-style-type: none"> ・「学習カード」、「学習評価ポイント」、「本時の交流の手引き」を参照してA及びB評価のクリアを目標とさせる。 ・だまし絵を用いたアイスブレイクを行い、お互いの意見を丁寧に聞き合える関係づくりに役立つ。
2 交流のポイントについて確認する。 「本当にそうか」と、書き手の主題・構成・結論が信頼性のあるものか、賛成・反対の視点的両方を想像し、チームで協力して検証すること。	<ul style="list-style-type: none"> ・「話し合いに必要な要素」、「課題解決チーム学習の力の段階的な獲得目標チェックリスト」を活用資料として明示する。 ・前時の評価規準に達しなかった生徒及び欠席者に入し、本時の学習が進められるように配慮する。
3 批判的な読みを4人のチームで交流し合う。 (1) 各自の読みを発表する。 〈反対の視点の例〉 「科学的説明としては正しくなくても、物語の方が納得がいく。」という筆者の結論には、疑問がある。なぜなら、このこと具体例が、子どもや古代ギリシャの例であり、これは、人間の発達段階の一つとして認めることはできても、成長して乗り越えるべきことではないかと考えられるからだ。その人にとって納得	<ul style="list-style-type: none"> ・賛成の視点、反対の視点的両方を想像することで、異なる意見に対しての寛容性や柔軟な思考を養い、多角的な視点で問題を検証できるように配慮する。

がいく物語とは、他者にとっては自己中心的世界観に過ぎない。現代社会における物語軽視が引き起こしている問題の実例を示していないため、説得力に欠ける。

(2) 各自の考えを交流して話し合う。

(3) 付箋，チェックリスト，ワークシートを活用し，話し合いの内容を比較・分類し，整理する。

4 本時の学習を振り返る。

・学習カード，チェックリスト，「学習評価ポイント」に自己評価を書き込む。

5 次時の学習への見通しをもつ。

㊦交流したことを生かして，書き手の主題設定，議論の進め方，その答えの妥当性についての考えを深め，広げている。（ワークシート・付箋の記述）

・自己評価を通して，各自の問題意識と関連させて考えを再構築しようとする意欲を喚起する。

6 授業の実際

(1) 付けたい力を明確にしたモデルの作成及び評価のポイントの明示

ア 付けたい力を明確にした学習評価のポイントの明示

導入時に，単元の評価のポイントを全時間にわたって明示したプリントを配付し，毎時の到達目標を明確にすることで，生徒がより具体的な到達目標をもち，高い評価を目指して課題解決に取り組むことができた。また，評価ポイントに基づく自己評価と学習カードで詳細な振り返りを行い，次時の課題を明確にすることができた。

イ 学習カードを活用した学習評価のポイントの振り返り

授業終了時 資料1 学習カードによる生徒の振り返り（ゴシック体）と教師助言

毎に学習カードを使い「学習評価ポイント」に基づく詳細な振り返りを行い，助言を記した（資料1）。

学習したこと・次の時間の課題 原稿用紙に自分が「あれ、ふしぎだな。」と思った経験を書く。 もっといろんなことを知りたい。	前向きな姿勢、素晴らしい！ これからもこの姿勢で！	立体的構成図が難しかった。	自分で内容を理解し、書けるようにしたい。	読み取りが遅かった。	理解すること（目標）。	自分の中で整理できず、よく分からなかった。	どのようにしたら読み取れるのがよく分析できている。これは成長への第一歩。読み取りの要素や自分の問題意識はしっかりしている。それを上手く整理できれば、飛躍できる！	自分の意見を発表することによって他の人の意見と比べられたり、賛成・反対できたりした。初めはディベートで何を話したらいいか、分からなかったが、今日は今までよりできたと思う。友達の見解を聞いてから分かったりすることがたくさんあったのでこれからも友達の見解を大切にしたい。
--------------------------------------------------------------------	------------------------------	---------------	----------------------	------------	-------------	-----------------------	----------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

これによって生徒は，次時の学習の見通しをもち，学習課題を明確にすることができた。

ウ 言語活動の体験を基にしたモデルの作成

教材文を読んで筆者に賛成する視点と筆者に反対する視点を書いたワークシートまとめ例を作成し，批判的な読みの言語活動を教師自らが先行モデルを提示したことで，生徒は批判的な読みを行う際に身に付ける力に対して，明確な基準をもつことができた。

(2) 評価のポイントに基づく評価結果を踏まえた指導の工夫

ア 批判的な読みを身に付けるための評価の工夫

単に著者の意見に賛成か反対かだけでなく，自分の生活体験を踏まえた主体的な読みのため，自分の問題意識，自分の生活体験を通して出てきた考えを大切にしたい。

(資料2)。生徒はまず、「ふしぎ」に思うという日常的な体験と関わる話題を契機に、自分の生活体験と関連させ、著者の主題・構成・結論が信頼性のあるものかを検証する読みを行った。さらに、主題を賛成、反対の両面から客観的に分析し、問題の全体像を把握するための読みを目指した。以上の結果をワークシートに記述した(資料3)。

資料2 自分の問題意識

私が「ふしぎだな。」と思うのは、宇宙の存在である。宇宙は私にとつてとつもない「ふしぎ」の塊である。確かに、私たちの住む地球も未知の世界が広がっている。しかし、あくまでも手の届く範囲内である。未知の世界を知ろうと思えば、自分の目でそれを見ることはできるのだ。それに比べて宇宙という世界は、無限に未知の世界が広がっている。私たちは、人類が実際に目にしたことがあるのは、月までである。その先の世界はあくまでも仮説に過ぎないと思う。だから私は宇宙を「ふしぎ」と感じる。

イ 批判的な読みを交流するための授業づくりの工夫
生徒の学習段階に対応して評価のポイントを示し、評価結果をチェックするための「課題解決チーム学習の力の段階的な獲得目標チェックリスト」を活用し、話し合いに必要な要素を段階を追って明示するとともに、相手の意見を尊重しながら意見を交流することができた。また、「交流の手引き」を使用し、授業のタイムテーブルと活動内容を示したことで、効率のよい目的に沿った交流が可能になった。交流による批判的な読みの成果は、付箋を活用して整理し、可視化した(資料4)。

資料3 賛成、反対双方の立場から書かれたワークシート

「大切なものを選び取る読み」のためのワークシート	セルフ・ディベート
筆者に賛成する視点	筆者に反対する視点
・人間にとつて根本的な「ふしぎ」に答えるものとしての物語すなわち神話が重要だと筆者は述べている。まさに個人が納得のいく答えを見つけたすには私の経験上でもその人が納得し得るものでなければ納得してくれない。つまりその個人単位で「ふしぎ」に対して自分なりに考えて答えることが重要だと思ふ。たとえ正しい答えでなくとも、自分が気づく結果になれば前進することになる。	・「ふしぎ」によつてはいくら自分が出せないものがある。例えば、私が「ふしぎ」だ。宇宙の経験上でもその人が納得し得るものでなければ納得してくれない。つまりその個人単位で「ふしぎ」に対して自分なりに考えて答えることが重要だと思ふ。たとえ正しい答えでなくとも、自分が気づく結果になれば前進することになる。

7 成果と課題

(1) 成果

ア 付きたい力を明確にしたモデルを作成し、評価ポイントを明示することで、生徒は具体的な目標をもち学習に取り組むことができた。また、学習カードの使用により、詳細な振り返りが可能になり、次時の課題を明確にすることができた。

資料4 交流の成果(左枠は付箋の記述)

イ 評価のポイントに基づく評価結果を踏まえた指導の工夫の中で生徒は、批判的な読みを身に付けるため、自分の生活体験を通して出てきた考えを大切にしたい読みを行った。その上で、「課題解決チーム学習の力の段階的な獲得目標チェックリスト」を用いて評価のポイントを明確にした意見交流をすることができた。

セルフ・ディベート	筆者に賛成する視点
①結論のとおり、自分が「ふしぎ」と思っていることの質問から科学的に説明されることが大切だと思ふ。②自然科学与比べて、神話の方が人間らしく生きるためには必要だと思ふ。③人間の感性や感情といったものは神話や物語から育まれていくものだと思うので、内的世界を関わらせることは大切だと思ふ。	筆者に反対する視点
①結論のとおり、自分が「ふしぎ」と思っていることの質問から科学的に説明されることが大切だと思ふ。②自然科学与比べて、神話の方が人間らしく生きるためには必要だと思ふ。③人間の感性や感情といったものは神話や物語から育まれていくものだと思うので、内的世界を関わらせることは大切だと思ふ。	①ニュートンの万有引力の例は自然科学が発達しなれば説明できなかったと思ふ。②人によつては、「ふしぎだな」と思ったことの納得いく答えが科学的な説明の場合があるため、ひとえに内的世界が答えだと言えないと思ふ。

(2) 課題

語彙力の不足により、批判的な読みの深化につなげられない生徒が、一部見られた。評論文特有の語彙を豊かにすることで、より活発な交流活動体験を積ませるための指導の工夫を図りたい。

Ⅲ 研究のまとめ

国語科では、研究主題「論理的に思考し表現する能力を育む国語科学習指導と評価」に向け、目指す児童生徒の姿を明確にした授業づくりを中心にして研究を進め、小学校2校、中学校1校、高等学校1校で授業研究に取り組んだ。

以下、研究の取組から本研究実践について主な成果と課題を述べる。

1 成果

(1) 付けたい力を明確にした予想される児童生徒の表現例に基づくモデルの作成及び評価のポイントの明示について

- ・中心となる語や文及び写真を活用し、段落相互の関係について電子黒板で図式化して提示したことで、文章全体の構成を考えて対比関係を捉える力の育成につながった。(小学校)
- ・重点指導事項を明らかにしたマトリックス型言語活動系統表を活用し、教師が本のショーウインドウのグッドモデルを作成し提示したことで、児童は課題解決の過程及び評価のポイントを明確に捉えられるようになった。(小学校)
- ・二つの文章を読み比べ、構成や表現の仕方について評価する意見文のグッドモデルを教師が作成し提示したことで、文章から読み取った内容をどのように意見文に反映させるか、また、どのような段落構成にすればよいのかを視覚的に捉えられるようになった。(中学校)
- ・批判的な読みの力を具現化した補助資料と、ワークシートのまとめ方の例をモデルとして提示したことで、言語活動における生徒の目的意識が高まった。(高等学校)

(2) 評価のポイントに基づく評価結果を踏まえた指導の工夫について

- ・第1次で診断的評価によって付けたい力を明確にし、第2次で形成的評価として段落相互の関係を図式化して読む力の育成を図り、第3次で総括的評価として、第2次で育成した読む力を確かなものにするために自分の考えをまとめ交流する活動を設定したことで、付けたい力を教師と児童が共有して課題に取り組むことができた。(小学校)
- ・自己評価カードや、付箋を活用した相互評価やオーディエンス評価を分析することにより、一人一人の学習状況を把握し、論理的に思考し表現する能力の育成に向けた指導に生かすことができた。(小学校)
- ・付けたい力の習得と活用を繰り返すスパイラル型の単元構成にしたことで、学習のつまずきをなくし、毎時間の評価を次時の指導の手立てに生かすことができた。(中学校)
- ・学習評価ポイントプリントを活用したことで、毎時間の到達目標が明確になり、より高い評価を目指して意欲的に取り組むことができるようになった。また、学習カードに書かれた振り返りから生徒の学習状況を把握し、次時の指導の手立てに生かすことができた。(高等学校)

2 課題

以下の点を今後、研究にしていくことで、本研究を更に深化させていきたい。

- ・言語活動のテーマが個人によって異なる場合の、評価規準の客観性や評価方法の在り方について研究する。
- ・児童の実態に応じて学校で系統立てた言語活動の見直しを行い、ティームティーチングや習熟度別指導なども取り入れながら、一人一人の論理的に思考し表現する能力の向上を図る。
- ・「おおむね満足できる」状況に至らない生徒の実態に寄り添った、効果的な指導の手立てについて研究する。
- ・評論文特有の語彙を豊かにし、より活発な交流活動体験を積ませる工夫を図る。

<引用文献>

- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説 国語編」平成20年8月
- ・文部科学省「中学校学習指導要領解説 国語編」平成20年9月
- ・文部科学省「高等学校学習指導要領解説 国語編」平成21年12月

関係者一覧

1 研究協力員

守谷市立御所ヶ丘小学校	教諭	嶋田 知成
筑西市立下館小学校	教諭	鈴木 敦子
北茨城市立華川中学校	教諭	坏 聡美
県立波崎柳川高等学校	教諭	十文字 富美絵

2 茨城県教育研修センター

	所長	武井 一郎
教科教育課	課長	金子 敏久
同	指導主事	井上 秀次
同	同	今瀬 一博